

ア ス ク

Advise and Support Care services

介護サービス相談サポートセンター
福祉サービス第三者評価機関
地域密着型サービス外部評価機関

アスクニュースレター No. 71

2019年1月30日

発行 特定非営利活動法人アスク
発行人 佐藤由紀子

〒325-0074 栃木県那須塩原市松浦町118-189
TEL/FAX : 0287-62-4310
E-mail : npo.asc@nasuinfo.or.jp
web : http://asc.nas.ne.jp/

理事からのメッセージ

色褪せた地球儀

児玉久美子（こだまくみこ）

今年、我が家は父のいない2度目のお正月を迎えた。ダイニングテーブルの父の席には今も父の写真が置いてある。写真の父に、生きていたころと同じように新年のあいさつをした。

父は子煩悩な人だったと父を知る誰もが言う。事実父はいつもやさしかった。週末は父の運転でよく出掛け、写真もたくさん撮った。当時小学校の運動会は平日だったけれど、昼休憩に戻ると母の隣に父の笑顔があった。わずかな時間でも必ず応援に来てくれた。大人になってからも、妹は父と腕を組んでよく買い物に出かけた。その場を同僚が見かけて、職場でからかわれていたようだ。思い出の父はいつもやさしく微笑んでいる。

その一方で父は仕事人間でもあった。父は獣医として地元の酪農業協同組合に勤め、主に指導や乳質改善に取り組んでいた。子どもの頃、夜中に連絡を受けて出かけていく姿を覚えている。台風の晩は、夜更けにずぶ濡れで帰ってきた。有名乳業会社の前で酪農家さんたちと座り込みをした武勇伝が残っている。父は、酪農と酪農家が好きだった。病に倒れる前年まで、酪農家の訪問を止めなかった。そんな父を、直接言ったことはなかったけれど「尊敬してたよ」。

昨夏、「在宅緩和ケアとちぎ2018夏合宿」に妹と参加した。1日目のテーマは、「グリーフケア」であった。グリーフケアとは、身近な人と死別して悲嘆にくれる人が、その悲しみから立ち直れるよう寄り添って支援することである。

那須塩原クリニックの黒崎史果先生の講演があり、専門職に期待される遺族支援についてお話を伺った。どのような看取りをしても家族は痛烈な寂しさと後悔を抱くことになる。だから、グリーフケアは亡くなる前から始める必要があると先生は話された。

そのあとの座談会では、実際にご家族を亡くされた4人の方がご自身の経験を語った。その話を聞きながら私たちも泣いた。家族の希望により自宅での看取りを選択した方が直面した葛藤。20年前に亡くなったご主人の思い出を涙ながらに語ったひと。数か月前に奥さんを亡くされて引きこもってしまった壮年男性は、「このままではいけないと思い今日この場に来た」と言った。現在それぞれの地域に分かち合いの会が作られている。講演された黒崎先生は、「分かち合いの会 in 那須」を立ち上げていらっしゃる。男性も地元の分かち合いの会に参加し同様の経験をした人たちと話したりすることで、徐々に前を向けるようになったそうだ。グリーフケアで大切なことは、一方的に励ますのではなく相手に寄り添う姿勢であると、黒崎先生のお話にもあった通りだと思った。

私自身、父の容体が悪くなってからの医療スタッフとの会話を今も鮮明に思い出してしまう。何年経っても大切な人の思い出が色褪せることはないのだとも思えた。このセミナーに参加したことは、私たちにとてもグリーフケアを体験する機会になったのかもしれない。

先日、リビングに置いたままの地球儀に気付いた来客に「立派な地球儀ですね」と言われた。大きな地球儀だと思ったらしい。世界の有名な山々の起伏もきちんと再現されている。長年勤めた酪農業協同組合で定年を迎えた時に、記念品として父がリクエストしたそうだ。何故、地球儀を？ 父らしいとも思えるけれど、ずっと疑問にも思っていた。それからオリンピックの開会式では活躍した。大きな出来事があったときにも地球儀を回して語り合った。そういえば父は何でも自分で確認したい人だったと思い出した。20年以上も前にもらったものなので、今はだいたい色褪せている。それでも時々ひとりで回している。今では大切な父の形見の地球儀になった。

(アスク理事、管理薬剤師、アスク評価調査者)

子ども・子育て支援について考える

— 実践者の立場から —

NPO法人子育てほっとねっと 西田由記子

前回のアスクニューズレター70号では、大妻女子大学の加藤悦雄先生に日本における子どもの諸問題について概観する寄稿をいただきました（※）。今回は、那須塩原市で多彩な活動を展開している、NPO法人子育てほっとねっと代表・西田由記子さんから子どもの育ちを支える子育て支援の実際について文章を寄せていただきました。前回の内容と併せてお読みください。

原点を振り返って ～ 2つの家庭文庫 ～

今から20年以上前、まだ夫婦2人で埼玉県狭山市の小さなアパートに住んでいたころ、アパートの一室で週に一回家庭文庫を開こうと思いつきました。アパートのすぐ隣に公団団地があり、団地に住む子どもたちが遊びに来るようになりました。来ると本などそっちのけで箱や紙を引っ張り出してはいろいろなものを作り、帰る頃になって「ああ、そうだった」とばかりに本棚から本を選び始め、借りて帰っていきました。「来週までとっておいてね」と作ったものを置いていくので、押し入れにしまっておくのですが、次の週に来るともうそんなことは忘れて、新しいものを作り出します。でも、もういいだろうと思う頃、「前に作ったあれ、どこにある？」などと言いつつ、捨てるに捨てられず、押し入れの中が不思議なものでいっぱいになっていきました。

家庭文庫なんだか、工作教室なんだかわからない有様でしたが、私はそれでよかったのです。なぜなら私は本が好きな子どもになってほしいと思って家庭文庫を開いたわけではなかったからです。もちろん本が好きになってもらえたらうれしいですが、それより何より子どもたちにとって学校でもない、家でもない、第三の居場所になりたいと思っていました。ちょっと学校でいやなことがあっても、家でうまくいかなくても、いられる場所があったらいいのではないかと…。（もっとも文庫に来ていた子どもたちは学校も家も好きだったようですが。）子どものころから本を読むの

が大好きで大人になってもコツコツ好きな絵本を買いためていた私にとっては、家庭文庫という形が一番自然な、自分できる子どもの居場所の形でした。「『おさるのぶんこ』だから、きっとおさるの赤ちゃんが生まれるんだね！」と言われながら、しばらくして我が家におさるのような(?)女の子が生まれました。娘は少し大きいお姉ちゃん、お兄ちゃんたちに囲まれて1歳になりました。

まもなく夫の転勤に伴って那須塩原市に移り住むことになり、今度は逆に親子で市内にあった家庭文庫『まきばの文庫』のお世話になるようになりました。文庫を主宰していたWさんが病気で倒れるまで約2年間、ほぼ毎週土曜日はまきばの文庫で過ごしました。娘はWさんが丹精した畑を好きだけ歩き回り、飼っていた烏骨鶏にエサをやることを自分の仕事と心得、部屋ではWさんのひざののって絵本を読んでもらっていました。私ははじめての子育てでガチガチになっていましたし、埼玉でやっとできた子育て友だちや人とのつながりを夫の転勤という自分の意思とは関係のない理由で断ち切られて最初は少々心がささくれていましたが、いつもWさんからそれでいいんだよと、言葉で、態度で自分のありのままの子育てを肯定してもらい、自分でもこれでいいんだと思えるようになっていきました。

私にとってこの2つの文庫で過ごした日々は私自身の子育ての根っこであり、今の活動の原点になっていると思っています。

子育て支援の活動へ ～ 子育てほっとねっと ～

NPO法人子育てほっとねっと

時を経て、縁あって「NPO法人子育てほっとねっと」を立ち上げ、子育て支援の活動に携わるようになりました。NPO法人子育てほっとねっとは「地域において地域の人の手による子育て支援と世代をこえた子育てのネットワークづくり」を目指し、市内でそれまでさまざまな子育て支援の活動をしていたメンバーが集まってできました。任意団体として活動していた期間も含めると活動を始めてからまもなく8年がたちます。

那須塩原市の委託を受け那須塩原市ファミリーサポートセンターの運営を始めたのをスタートに、那須塩原市つどいの広場「ま～る」、「ほっぺ」という2つの地域子育て支援拠点の運営、自主事業として講演会やイベント、サークル活動時等の集団託児事業、月2回の子ども食堂の運営、昨年11月からは家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」と、自分たちが必要と思うことを自分たちの手で、をモットーに活動を広げてきました。

自分たちの活動を一言で表現しようとする「子育て支援」ということばになってしましますが、子どもとその親の生活を応援することで「子どもたちが心身ともに健やかに育つこと」を何よりも願っています。子育て支援の活動をしていると、時に自分たちがだれのために活動しているのか見失いそうになってしまうこともあります。「子どものためか」「親のためか」思い悩むこともありますが、そのようなときには立ち止まってその先にある「子どもの最善の利益」を見い出していきたいと思っています。

地域子育て支援拠点事業

ここでNPO法人子育てほっとねっとの活動のなかから、現在私が直接携わっている地域子育て支援拠点事業（つどいの広場という名称で行われている）を取り上げ、子ども・子育て支援について考えてみたいと思います。

地域子育て支援拠点事業は「地域において子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点の設置を推進することにより、地域の子育て支援機能の

充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを支援する」事業です。主に未就学児（3歳以下としているところもある）を対象とし、

- ① 親子の交流の場の提供と交流の促進
- ② 子育てに関する相談・援助の実施
- ③ 地域の子育て情報の提供
- ④ 子育て及び子育てに関する講習の実施

の4つを基本事業としています。現在、児童福祉法に基づく子育て支援事業、社会福祉法における第2種社会福祉事業に位置付けられており、子育て家庭にとって身近な地域の拠点として、子育て支援の中核的機能を担うことが期待されています。

地域子育て支援拠点は、現在、全国に7,259か所、栃木県内には98か所（29年度交付決定ベース）あります。地域子育て支援拠点とは何か、地域子育て支援拠点における活動の指標「ガイドライン」では、よりわかりやすい言葉で次のように説明されています。

地域子育て支援拠点は、親同士の出会いと交流の場であり、子どもたちが自由に遊びかかわりあう場でもある。

親は親で支え合い、子どもは子どもで育ちあい、地域の人たちが親子を温かく見守ることが、子育て・子育てにおいては必要不可欠な経験となる。すなわち、地域子育て支援拠点は、親子・家庭・地域社会の交わりをつくりだす場である。

地域子育て支援拠点事業は、他の多くの子育て支援事業が子育ての労力を福祉サービスによって肩代わりしようとするものであるのに対して、親子と一緒に施設に通いながら子育ての労力を引き受けてなお子育ての楽しさを実感できるように支援していこうという点で異質な性質をもっているといわれています。

地域子育て支援拠点事業は成り立ちの異なる2つの事業が統合・再編されて生まれました。一つは主に保育所に併設され保育の専門性に依拠して相談・指導を中心としてきた子育て支援センター

事業、もう一つは自分たちの居場所が欲しいと願った子育て当事者の草の根的な市民活動から生まれたつどいの広場事業です。そのため一口に地域子育て支援拠点といっても、運営主体、実施場所、支援内容など多種多様です。地域子育て支援拠点のなかでも、子育て中の親子が集い、交流することを中心的な機能とした場はこれまで広く「ひろば」と呼ばれてきました。私たちNPO法人子育てほっとねっとが運営に携わっている地域子育て支援拠点もこの「ひろば」にあたるといえます。

「ひろば」は単なる子どもの遊び場ではなく、子どもが育つ、親が育つ、関係が育つ場です。そこにはひろばスタッフがあり、これら3つの育ちを支えています。ひろばスタッフは指導者ではなく、支援者です。主役は親であり子です。「親と子の最大の理解者であり、日常生活における『話し相手』『遊び相手』であり、地域の人と人との関係を紡ぎだす」役割が求められています。

自分たちの活動に即して子どもの育ち、親の育ちについて考えてみたいと思います。

子どもの育ちを支える

私たちひろばスタッフの一番の仕事は、子どもたち一人一人が発達や興味・関心に応じてじっくりと遊びこめる環境を作り出すことです。家庭ではさまざまな事情からできない、あるいはやらない遊びもひろばでならできるといえることがたくさんあります。

今は子どもが子どもらしく過ごす、そんな当たり前のことがとても難しい時代になっていると感じます。それは小学生や中学生ばかりではなく、乳幼児でさえも同じような状況に置かれています。いつも早く何かができるようになることを期待され、急がされています。「保育園・幼稚園に行くと困らないように…」「小学校に行くとできなかったらかわいそう…」いつも次の準備に追わ

れています。年齢不相応にいい子であることが求められていると感じることが少なくありません。兄弟の数も減り、自分の子どもが生まれるまで赤ちゃんに接する機会がなかったという人も多くなか、1歳児がきちんと椅子に座って食べられない、イヤイヤ期真っただ中の2歳児がお友だちと仲よくできない、物をお友だちに貸してあげられないとその年齢からすれば無理なからぬことが、お母さんたちにとっては大きな悩みになっていたりします。

そのようななかで子どもたちの成長のエネルギー源である遊びを十分に保障すること、そして、そのなかで一人一人を見守り、その子なりの成長を見つけて伝え、親と共に喜び合うことはとても大切なことだと考えています。

子ども同士の物の取り合いも他の子どもとのかかわりを学ぶ大切な場であり、危なくない限りは少し見守るようにしています。時にはすぐに飛んでいこうするお母さんをとめることもあります。気になるかもしれないけれど、ここではとったとられたはお互い様ということにしませんか、と。また、ひろばは親子だけで過ごす時間の長い乳幼児が親以外の大人とかわる大事な機会でもあります。

親の育ちを支える

ひろばスタッフは親の支援に多くの時間を費やしています。親が支えを得て、子育てに取り組む意欲や自信を高めていくことが、親子の関係性と家庭生活の安定につながり、それがさらには子どもの健やかな成長につながっていくと考えられているからです。ひろばの継続利用によって親自身が育っていった事例として、2017年度にHひろばで行ったインタビュー調査（調査対象者12名）から見えてきた、ひろばにおける親の育ちの道筋をここにあげておきたいと思います。（図1）

母親自身がひろばに居心地のよさを感じ、同時に子どもたちがひろばで楽しそうに遊ぶのを見て、居場所として繰り返し訪れるようになる



まずはスタッフとの関わりに安心感を抱くと、だんだんと他の母親たちとの日常的な交流が生まれる

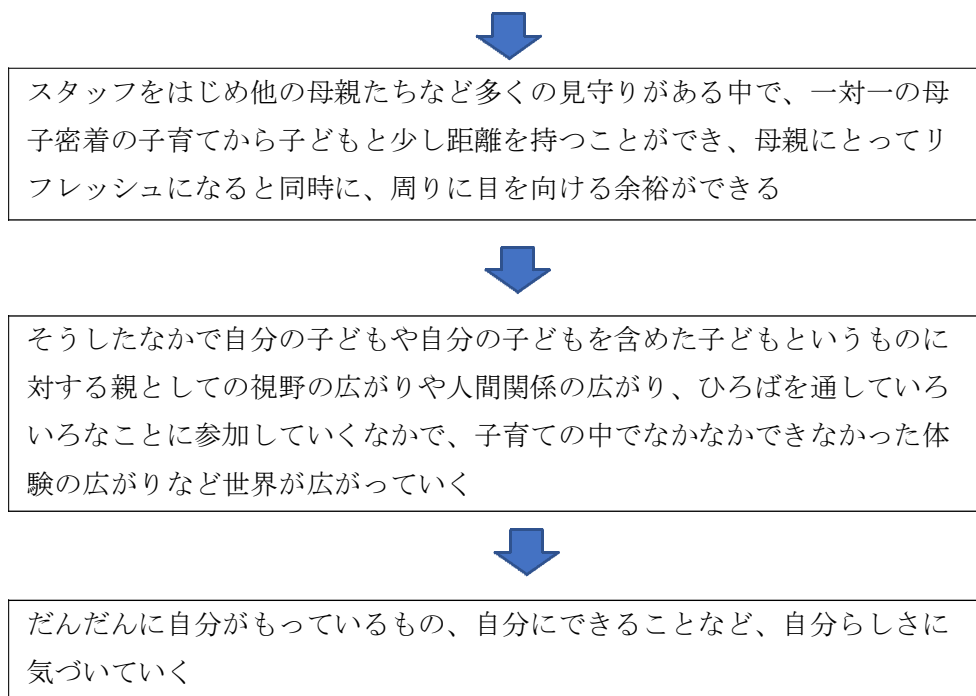


図1：親の育ちの道筋

おわりに ～ 切れ目のない支援に向けて ～

今回子ども・子育て支援施策の一例として取り上げた地域子育て支援拠点事業が、アスクニュースレター70号（※）で示されている児童虐待、子どもの貧困、不登校、いじめや自殺、ひきこもり等、子ども・若者を取り巻くさまざまな生活問題の解決に今後どれだけ寄与することができるのか、正直わかりません。しかし、それらは大きくなってある日突然出てきたわけではなく、子育て・子育てのスタート時期から何かできる手助けもあったのではないかとも思うのです。

地域子育て支援拠点事業に携わるようになって5年。多くの親子に出会いました。幼稚園・保育園に入園した子どもたちが休みの時にぐんと成長した姿を見せてくれたり、またお世話になりますと第2子、第3子を連れて久しぶりのお母さんがやってきたりします。長いことほとんど誰ともし

ゃべらず自分の子どもとだけ遊んで帰るを繰り返すスタッフ一同心配していたお母さんも、今ではいろいろなお母さんとおしゃべりを楽しみ、笑い、時には新しい友だちを誘ってやってきます。そのような姿を見ると、子育て・子育てのよいスタートを後押しはできたのかなと思います。

子育て・子育てはまだまだ続きます。乳幼児期からの切れ目のない支援を考えると、それぞれの時期に子ども自身への直接の支援、親・家族へ支援することを通しての子どもの支援の両方がそろってはじめて切れ目のない支援といえるでしょう。市町村の子ども・子育て支援事業計画の最終年度を前にして、いったいどこに抜けがあるのか、もう一度よく考えていく必要があると思っています。

※アスクニュースレター70号 特別寄稿：子ども支援

「子ども支援にどのように取り組むか ―子どもの権利の具体化に向けて―」

筆者：加藤悦雄（大妻女子大学）

* NPO法人子育てほっとねっとHP <http://hottonetto.com/>

* 那須塩原市子育て関連HP <http://www.city.nasushiobara.lg.jp/kosodate/d01/index.html>



ソーシャルイノベーション

社会福祉法人佛子園が「ごちゃまぜ」で挑む地方創生

雄谷良成 監修 竹本鉄雄 編著 ダイヤモンド社 刊
1500円 + 税 2018年9月26日 発行

雄谷良成（オオヤリヨウセイ）社会福祉法人佛子園理事長、公益社団法人青年海外協力会会長、全国生涯活躍のまち推進協議会会長、日蓮宗普香山連昌寺住職。1961年石川県生れ。金沢大学教育学部卒業後、特別支援学級の教員を経て、青年海外協力隊隊員としてドミニカ共和国に派遣。その後、北國新聞社勤務などを経て佛子園へ。「星ヶ丘牧場」「日本海外倶楽部」「三草二木 西圓寺」「Share金沢」「B's行善寺」「輪島KABULET」といった特徴的な社会福祉施設を牽引し、注目を集める。金沢大学非常勤講師。

竹本鉄雄（タケモトテツオ）ライター。1964年石川県生れ。立命館大学産業社会学部卒業後、地方紙記者、情報誌編集者を経て、98年に編集プロダクションのライターハウスに入社、現在に至る。主に新聞企画記事、各種情報誌・書籍にて執筆。社史なども手がける。

「イノベーション」、それは新しい方法や習慣を導入することを意味する。『社会福祉法人佛子園が「ごちゃまぜ」で挑む地方創生！』というサブタイトルが付いたこの本は、まさにごちゃまぜという手法で社会的貢献と営利を両立させた新しい福祉のまちづくり、地方創生に取り組み、成功させてきた佛子園の雄谷良成さんによるソーシャルイノベーションを紹介したものである。

1960年、石川県に社会福祉法人佛子園という名の障害児施設が創設された。翌年に生れた、現在の理事長である雄谷良成さんは、施設の職員ほとんどが祖父母や両親、おじ、おばなど身内であったことから、施設内で障害児らと寝食を共にし成長した。その中で、障害のある人間とない人間を隔てる見えない壁の存在に気付く。

やがて教育学部で障害児心理を学び、特別支援学級の教員を経て青年海外協力隊に参加した彼は、派遣先の途上国で、貧しいはずなのにみんなが支えあって幸せそうに暮らしている姿を見る。そこで学んだことを、人口減少・高齢化が進んだ日本で生かしたい、共生・ソーシャルインクルージョンの社会を実現したいという思いが、「時代を先取りした福祉のまちづくり」と言われる現在の取り組みへとつながっていく。

奥能登で地ビールの製造・販売を行う障害者就労支援施設「日本海倶楽部」、廃寺寸前の寺で、障害者の就労支援継続施設と地域住民が利用できる温泉入浴施設の機能を兼ね備えた「三草二木 西圓寺」、生涯活躍のまちの先進モデルとされる「シェア金沢」、密度の濃いごちゃまぜのまちを実現した「B's行善寺」、そして地方創生のモデルとなった「輪島カブーレ」。老人、子ども、障害者・児、片親家庭、外国人、地域住民、どんな人でも集える場所、まさしくごちゃまぜの街が、考えも及ばない化学変化を引き起こし、人々の心を変えていく。次々と進化していくそのまちづくりの内容には、ただただ驚き目を見張るばかりだ。

あまりに多彩なその取り組みは、ぜひ本書で読んでもらいたい。多数掲載されている施設の写真からも、そのスマートで先進的な雰囲気を感じられるに違いない。

縦割りの日本社会の中でさらに画一的な福祉のありかたを打ち壊した佛子園の取り組みは本当に素晴らしい。政府も注目しているというこうした取り組みが、全国へと広がっていく様子を、そしてこのごちゃごちゃがもたらす驚くべき化学変化を、ぜひこの目で見てみたいと心から願った。(HK)

介護や福祉にまつわるあれこれを徒然なるままに...

98才、伯母の自律死。(その2：葬儀)

伯母が亡くなり、警察病院で検死の後、成年後見人のYさんが把握していた書類の中に近くの斎場の会員証がありました。とりあえず病院からその斎場へ遺体を移し、さて、葬儀の話になりました。今まで同様、Yさんと私の娘がやってくれました。

夜になって娘から電話で報告がありました。伯母が会員として支払い済みの金額は約30万円。葬儀屋さんの提案は総額200万円の葬儀。Yさんは、お金はあるけれど、どうしましょうか、とのこと。私は「待った」をかけました。98才の伯母の葬儀に何百人もの参列者が来るわけではなく、家族葬で充分と伝えました。ところが娘が言うには、葬儀屋さんは娘のいう事に耳を貸さず、どんどん話を進めてしまう感じだったそうで、これ以上娘に任せるのは無理だと思い、次の日に私が葬儀屋さんに電話をかけました。

葬儀屋さんとしては、伯母が支払ってあった金額は、あくまでも葬儀に必要な一部の費用を前払いした、という内容だそうで、それに見合った内容の葬儀は200万円、とのことで譲りません。単純にお金をプールしたということではないので、家族葬のような内容には使えないということでした。しかし、親類縁者も遠方の方々が多く、ご近所さんも転居や逝去されていて、老人会とも疎遠になっている現在、参列者は全部で数名どまりであることは明らかです。私は、東京在住のすぐ下の弟に交渉を頼みました。

伯母の妹である私の母に相談したところ、伯母は生前「こじんまりと（葬儀を）やってくればいいのよ。」と言っていたそうで、弟にもそのことを伝えました。

弟は私立大学の先生をしています。次の日、授業が終わってから葬儀屋へ行き、交渉にあたってくれました。結果、かなりのやり取りをしたそうで、「直葬」にすると連絡がありました。「直葬」とは・・・「こじんまり」よりかなりサッパリしたものに・・・。「伯母ちゃんゴメン。」と思いましたが、了解しました。それでも総額80万円近くなるとのこと。交渉の結果30万円を引いた残りは弟が立て替えてくれることになりました。Yさんによると、遺産分割協議が終わらないと伯母のお金は使えないとのことで、それまでは全て誰かが立て替えるしかないそうです。相続人は母で、その子である私たちには相続権がありません。でも、立て替えなければなりません・・・。

何とか葬儀の日程が決まり、相続人の皆さんに電話・文書で連絡しました。母は前年、転んで大腿骨を骨折し、ボルトを入れる手術をしており、やっと杖をついて歩ける状態だったので、葬儀は不参加。弟が施主となりました。

当日、練馬の葬儀屋さんへ行く前の午前中に、娘と待ち合わせし、伯母がお世話になっていたお寿司屋さんでデイサービスへ手土産を持って長年のお礼を伝えました。その後、伯母の家へ行き、お棺に入れるものを見つくりました。家の中は、警察があちこち搜索したとのことで、めちゃくちゃでした。亡くなっていた炬燵もそのままでした。台所や寝室も雑然としていて、元気な時はとてもきれい好きだった伯母の家とは思えませんでした。

娘と昼食後、葬儀屋さんへ。霊安室の横の控室に親戚とお寿司屋さん夫婦、デイサービス

の方、後見人のYさんが集まってきました。その前の狭いロビーにお棺があり、きれいにお化粧してもらった伯母がいました。総勢14名。弟の挨拶と皆さんの自己紹介の後、お棺にお花を入れ、遺品をいくつか入れました。伯母の弟のお連れ合いが伯母へあてた手紙を読み、式は終了。淡々と粛々、さっぱりとしたものでした。親戚は霊柩車とマイクロバスに分乗して火葬場へ。

火葬の間、本来ならば故人となった伯母について皆でしみり思い出話などをして過ごすものなのでしょうが、親戚が集まるのは今しかない、と後見人のYさんが口火を切り、遺産分割協議が始まりました……。次回へ続く。
(佐藤かおり アスク会員・獣医師)

アスクの活動から

外部評価・福祉サービス第三者評価活動

評価結果の公表（2019年1月30日現在）

《グループホーム外部評価》WAM NET (<http://www.wam.go.jp/>) に評価結果公表

GH和、GHさくらハウス、くろいそケアセンターそよ風（那須塩原市）

GHアベータ（那珂川町）

《福祉サービス第三者評価》とちぎ福祉サービス第三者評価推進機構 <http://www.tfhs.jp/>

那須塩原市なべかけ保育園、こばと保育園、こばとキッズ（小山市）

《社会的養護関係施設》全国社会福祉協議会 <http://www.shakyo-hyouka.net/search/index.php>

インフォメーション

1. なすしおばら×協働サミット 2018 どうする?? なすしおばら

2月9日（土）13:00～ いきいきふれあいセンター 大会議室

人を巻き込みながら 挑戦する普通じゃない 公務員の話と グループディスカッション

講師：長野県塩尻市役所企画政策部 地方創生推進課シティブロモーション係長 山田 崇

申込先：那須塩原市市民活動センター TEL 0287-73-5741

2. 映画『隣となる人』上映会

ある児童養護施設の日常を追う8年間のドキュメンタリー

2月2日（土）13:30～ 那須塩原市健康長寿センター内「西那須野保健センター」

参加費 500円 定員100名（要・事前申込み）

問合せ NPO法人すくすく子育てやぎハウス TEL・FAX 0287-74-2988（14時以降）

3. 草の根ケアネット会議 シリーズ「医療と介護の上手な使い方」

1月30日（水）16:00～ 「お医者さんに話を聞いてみよう」

2月22日（金）16:00～ 「賢い薬局の利用方法を考えてみよう」

3月22日（金）16:00～ 「在宅介護について話を聞いてみよう」

会場：那須塩原市とようら公民館

問合せ：地域包括支援センター寿山荘 TEL 0287-62-9655

4. 講演会「多職種の連携が支えるこれからの在宅医療」

2月6日（水）19:00～ 三島ホール（那須塩原市東三島6丁目）

問合せ：那須郡市医師会 TEL 0287-23-8647

寄稿
歓迎

◆アスクニュースレターは季刊誌で、おおむね1月・4月・7月・10月に発行します。

次号は4月発行予定です。読者からの情報や投稿を歓迎いたします。

◆「福祉つれづれ」欄および「本紹介」欄への寄稿は、1000字程度でお願いします。

◆原稿はニュースレター発行元へ、3月20日までにメール又はFAXでお送り下さい。